

Title	現実の問題と学問の問題
Author(s)	相原, 信作
Citation	大阪大学文学部紀要. 1968, 14, p. 25-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12218
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現実の問題と学問の問題

相 原 信 作

現実の問題と学問の問題

相 原 信 作

世界中の人々の眼がアジアの一角に起こっている戦争に向かってそそがれていることは、当然であろう。それは、その成行いかんによって、人類全体の各成員の運命に大きな影響をもっており、最悪の場合には、私たちの生活の計画、予想を根本から変更せざるをえないように私たちを強いる事態にまで発展しないとはいえない。わけてもわれわれ日本に住む者たちにとって、とくに事は重大であるのは言うまでもない。

かりに目下の平和運動が成功し、現在の地点の戦火が収まったと仮定しても、世界のもろもろの対立の争点が解決したことにはならず、それが解決されない以上、私たちの生活は、きわめて大きい脅威にさらされつづけないわけにはゆかない。しかも今のところ平和運動が成功してアジアに和平がもたらされる可能性は少なく、次第に大戦争にまで拡大するかも知れないという観測さえ行われている。

学問というものが人間の全体にかんけいし、人類全般の共同の仕事をいみする以上、上記のごとき人類全体の運命にかかわる事柄は、およそ学問に従事するすべての人々にとって重大な関心事であるはずであり、私もまた学問の一端につらなるものとして、この事態に関心をもっているつもりである。しかし私は、いまだ多くの人々によって義務と考えられているような、いわゆる平和のための運動には踏み出すことができないでいる。

私は、目の前におこっているこの事態を一個の病気と見なすことはできないかと思う。もし病気ならば、最も大切なことは、これに反対を表明し、病気をいけないと叫ぶことではない、大切なのはこれをまず病気として理解し、それがどこからおこっているかをつきとめ、もし治療法があるならばそれを導き出すことである。戦争は、暴漢があばれているというような単純な事件とは異なって、複雑な深刻な病気ではないだろうか、人間心理の深層から発生する、地震などの自然災害にも似たもの、ではないだろうか、と思う。私たちは、かかる理解から実践をひき出すべきである。より端的に言えば、理解こそ学者の実践ではあるまいか、という気さえするのである。このような口幅ったい、大それた前置きにしては甚だ貧しい成果ではあるが、以下この目の前の恐ろしい事態に対する私の理解のひとつの、ささやかな試みをする。

私はまずひとつの仮説から出発しようと思う。この仮説は、今からすでに百年以上も前に(1854年)ランケが当時の世界状況を説明するために用いたものほとんど変わらないもので、世界史の最も支配的な影響力をイギリス及びアメリカにあるものと認めるものである。ランケはドイツ人であるが、世界におけるイギリス文明の支配を認め、ドイツ・バヴァリアの国王マクシミリヤン二世に向って、「イギリスによって樹立せられ、類縁的なアングロ・アメリカ的理念によって倍加せられたかくも巨大な力は、実にいまだかつて存在しなかったところである。

イギリス人はその貿易をもって全世界を支配しつつある。彼らは東インドを、そして中国をヨーロッパに向かって開放した。これらすべての国は、いわばヨーロッパ精神の脚下に平伏しつつある。まさにここにこそ立憲的共和的原理のかくも圧倒的優勢の基礎は横たわっている。けだしこの原理に基づき国家形態の支配する諸民族こそ今や世界において最大の成功を収めつつあるものに外ならないからである。」と述べた。むしろ今日においては、イギリスは後退したが、アメリカはその後をうけて優越の座につき、われわれは、アングロ・アメリカ的理念を代表する国家が依然として最大の影響力をふるっているという一応の仮説に立って考えることができると思うのである。ランケが上のように述べていたちょうど同じころ（1848年共産党宣言）、マルクスは、まさに当時のアングロ・アメリカ的文明の首都であったロンドンにおいて、次のような言葉をもって世界状況を要約していた。「ブルジョアジーは全生産要具の急速な改良、限りなく容易になった交通によって、あらゆる、最も未開な国民をすら文明にひき入れる。その商品の廉価こそ、かれらがいかなる万里の長城をもうち破り、未開国民のどんな頑固な排外心をも屈服させる重砲である。かくてブルジョアジーは、一切の国民を、もし自ら滅亡したくないなら、いやおうなしにブルジョアジーの生産様式を採用せざるをえないように強制する。かれらはこれら国民にいわゆる文明を導入すべく、すなわち自分自身ブルジョアとなるように強制するのである。一言でいえば、ブルジョアジーは世界をば己れ自身の姿に似せて創造するのである。」このマルクスの言葉は、ランケが具体的に英米国家の世界支配として、アングロ・アメリカ的理念の力として、立憲的共和的原理の圧倒的優勢として述べた事実をやや抽象的な概念をもって描写したものといえよう。「賃労働と資本」の冒頭においてマルクスが英国について書いているところをよむと、彼がブルジョアというとき、何よりもまずブルジョア中のブルジョアともいふべきイギリスのブルジョアを念頭においていたことは疑うことができない。そしてイギリスの後退と共に資本主義の中心がアメリカに移ったとしても、ブルジョア文明がアングロ・アメリカ的国家によって代表せられ、これが今日の世界に向かって、最も圧倒的な支配力をふるっている事実には変わりはないと思う。私は日本が太平洋戦争に入ろうとしていたころ、当時の世界状況を理解しようとして、このアングロ・アメリカ的国家の優越支配という仮説に立つことが最も適切であることを見出した。そして17、18世紀のヨーロッパの歴史が、フランスの圧倒的優越をいかにしてくつがえし得るかということであったように、百年以来の世界史はひっきり、この盤石のように重く君臨するアングロ・アメリカ的国家の圧力をどうして撥ねかえすことができるか、であると考えた。30年を経た今日でも、この仮説そのものは少しもまちがっていなかったと思うし、その後の状況はますますこの仮説を立証する方向に進みつつあるとも言えると思う。この百年このかた多くの力が、このアングロ・アメリカ的な支配をくつがえし、撥ねかえそうとして働いたが、結果はますますこの支配力をつよめるのに役立ったようにさえ見える。それゆえに私は、今日の世界の出来事を理解するのに、百年以前にランケによって提出された仮説、あるいは、同じころマルクスが抽象的にではあるが

認めた仮説，すなわちアングロ・アメリカ的理念の支配という事態を手がかりにしたい，と思うのである。

この百年以来その圧迫からの自由解放をたえず課題として登場せしめながら，しかもいまだかつてその解答を結晶させることのできなかつたアングロ・アメリカ優位の現実を，最も端的に示すものとして，人類の自然観における，かの17世紀の英国の物理学者ニュウトンの位置を思い浮べてみることは，それほどおかしいであろうか。人類は，3回にわたってりんごの実によってひどい目にあった，1回目は楽園追放の原因となったエバのりんご，2回目はトロイ戦争を起動したパリスのりんご，そして3回目は万有引力発見の機縁となったニュウトンのりんごであると，ヘーゲルはその若き日の学位論文「衛星の軌道について」の中でニュウトンを攻撃しつつ言ったが，むしろヘーゲルの試みた反論もニュウトンの王座を微動だにさせなかった。物理学における大革命は19世紀の電磁気学の発達に始まり20世紀に入ってアインシュタインの相対性理論とマクス・プランクの後に続いた量子力学として生じ，ゆるぎないニュウトンの位置もようやく危うくなってきたようであるが，現代科学技術の最先端といわれる人工衛星の如きものも，その運行の原理はニュウトン物理学によって余すところなくあたえられているといわれるように，ある特殊な領域，たとえば水星軌道のごくわずかな変動とか，重力の場における光線の彎曲とか，あるいはいわゆる微視的領域を除いて，われわれ人間の，目で見，耳で聞く日常経験の世界，いわゆる巨視的世界は，基本的にはニュウトン物理学によって今日も充分間に合うといわれる。相対性理論や原子核物理学の出現した現在といえども，日蝕や月蝕の観測，その予報の計算は全部ニュウトン力学によって行われていることは言うまでもない。

しばらく前のある夜ラジオのスイッチをいじっていたところ偶然にも北京からの放送が流れてきた。突然のことであったので，前後関係をたしかめることができなかつたが，とにかく，「ニュウトンの理論を研究しないでアインシュタインの理論を理解することはできない云々」という言葉であるにちがいがなかつた。これは，それこそ英米の世界支配に挑戦し，この百年以来いまだ何度となく試みられて成就され得なかつた大事業を自分たちこそ成就してみせるという使命感に燃えたと見える中国からの声としては，まことに珍らしい言葉であったので，私の記憶に残った。私は，まだ中国人は，ニュウトンに対する評価だけは失っていないのだと思ったのである。ニュウトンはいうまでもなく，ミルトンやロックやヒュウムやアダム・スミスを産んだ特定の文化の産物である。過去の一切の文化を批判せんとする最近の中国の文化大革命なるものも，ニュウトンの学習を抜きにすることはできないという事実をつうじて，われわれは，ニュウトンを産んだ特定の文明の強烈な影響が中国までを覆っていることをたしかめることができる。

ニュウトン物理学の最も大きい問題点はどこにあるか，物理学について全くの門外漢であるものが，このような問を出すことは極めて僭越かつ滑稽に思われるであろうが，私はただ多くの初歩の解説書に書かれていることを問題にし，だれもが口にしてきた問をくりかえすだけな

のである。すなわち、ニュウトンの万有引力の説は、一つの物体と他の物体とが何等の媒体なしに相互に引張り合うという、いわゆる遠隔作用の可能性が前提になっているということである。ニュウトンは、太陽と地球との間には何物も存在しない、全くの真空である、その真空を隔てて太陽は地球を引張る、というふうに考える。太陽と地球のみならず宇宙間の物体はことごとくかかる無媒介の真空中に浮んで相互に引張り合っている、まことにふしぎであるが、このふしぎな宇宙観、物質観、自然観がニュウトンによって整然たる体系をあたえられ、それ以後の3百年間今日にいたるまで驚くべき文明をつくり出し、巨視的には今もなお人工衛星の如きものまでも規定しながら全人類の生活を左右しているのである。これはまことに目ざましいニュウトン物理学の成果といわなければならないが、しかも成果は成果として、われわれは、宇宙間の物体が真空中にあって相互に力を及ぼし合うというニュウトン物理学の根本原理そのものには、大きな問題があることを感じないわけにはゆかぬ。ある仮定を立てて進んで行ったところ非常にうまく成功できたということと、その仮定が正しいかどうかということとは全く別のことである。

はたせるかな、ニュウトン以後19世紀中葉における電磁気の研究、とくに20世紀を境として生じた物理学の大革命は、この個物と個物とが真空を隔てて相互に力を及ぼすことができるという遠隔作用の考え方を維持することができなくなったことから起こったといわれる。アインシュタインは子供のころ磁石が離れたところにある物を引張ることのふしぎさに心をうたれて物理学への興味をそそられたと伝えられるが、物理学の大革命は、個々の物体に重きを置き、物体と物体との間にある空間を等閑にした古典力学の遠隔作用の理論に対して素朴な疑問を提出したところから始まったといえると思う。相対性理論のかがやかしい勝利は、古典理論ではどうしても説明できなかった水星の軌道のずれや、太陽の附近を通る光線の彎曲を空間そのもののゆがみとして解明したことであるが、これらはいずれも、個々の物体を本位とする考え方に対して逆に物体と物体との間にあるものを重視する考え方の現われであり、アインシュタインは、物理学の理想として、このような物体と物体との間にあるものから物体を導き出し、いわば物体なる概念を抹殺することを考えていたことは、そのインフェルトとの共著「物理学はいかに創られたか」に語られている通りである。量子力学、素粒子論についていえば、朝永振一郎氏の「量子力学的世界像」に述べられている如く、今日の物理学者が自然の窮極的要素として考えているものは、古典物理学により私たちが中学生のころ教えられた、米粒をひじょうに小さくしたようなものとは異なる、われわれの日常生活の経験との対応を拒むものようであり、ここにおいて、物体の概念を物理学から抹殺する理想は一段と達成せられたようであるが、むろんそれはいまだ実現されておらず、そもそも素粒子論という言葉そのものが古典的な粒子論から完全に脱皮し得ていないことを示している。

今日物理学の理論の世界を支配している、何とも言いようのない重苦しい感じ、打開すべくして打開し得ない壁に行当っているという意識、それは門外漢である私たちにも察することが

できる。巨視的世界、私たちの、目で見耳で聞く日常経験の世界では依然としてニュウトンの古典力学が王座をゆずらない。それは、おとろえを見せるどころか新しい反逆者の登場した最近にもなお人工衛星の如きものを産んでますます健在であるように見える。しかも相対性理論は、ニュウトンの遠隔作用の思想を少なくとも理論的には根本からぐらつかせ、真空をはさんで相互に力を及ぼすことのできる無数の独立的個体というのは見せかけに過ぎず、各個体は目にみえぬ紐帯（場）でつながれ、この紐帯（場）に依存している、との考え方をさし示した。太陽も地球もニュウトン力学における個体としての独立性を失い始めたのである。そして素粒子論にいたっては、個体も紐帯も共に実在性を稀薄にして、あるひとつの数学的式によってのみ表現せられるところの、あるもの、としか考えられなくなった。このような、古典力学を根本からくつがえす革命的理論は、むろんたんなる理論にとどまらず原子エネルギーの開発となってわれわれの現実の生活そのものを大きく左右する成果をもたらしたことは、周知のごとくである。それにもかかわらず、古典理論とこれらの革命理論とは、相並んで一個の統一的な体系の中に包摂せられ得ないのである。核兵器の問題が、人類全滅の可能性を顕在化せしめることによって、従来の軍事外交政治経済の諸法則を根柢からゆりうごかしたように、外ならぬこの核兵器をもたらした物理学の理論は、今までの人類の自然観を根本から動揺させてしまったと言える。かくの如きが、現在の物理学界をおおっている重苦しい空気の原因であり、行詰りの感じの源泉であると思う。

私はここで、現在の物理学のこのような窮状を端的に示したひとつの例を挙げたいと思う。それは、スターリンの死後数年を経てソウエトにいわゆる雪解けの訪れたころ、唯物弁証法の哲学も最近の自然科学の成果をとり入れてより具体的になる必要があるという趣旨から、しきりに相対性理論や素粒子論の問題が論ぜられ、科学者と哲学者との共同の討論会のようなものが盛んに催されたときのことである。その中の最も大きな会議の記事が「哲学の諸問題」(Вопросы Философии 1959, 2.) に報道されたのであるが、その記事の記者が、さまざまな問題や討論を叙述した後に、それらを締めくくることばとして、今や物質の理論なるものは、いかなるものも部分的領域においてしかあてはまらず、物質界全体を展望するに足る理論は存在しないことが明らかになった、理論は打開することの不可能な壁の前に立って途方にくれている、ここにいたって、われわれは狂気 (сумасшедший) になる以外に方法がないのだ、新しい道は、ただ狂気のみが、発見することができるのだ、という、ある物理学者の発言を紹介していたのである。私はそれからまもなく同じ雑誌 (1960, 4) の論文 (M.A. マルコフ) で、パウリ、ポーアまで代表的な西方の科学者の出席したアメリカの学会において、しきりに狂気 (crazy) の必要が説かれたとの記事を見出したのであるが、このような言葉が、東西の、本来最も理性的であるべき物理学者の口から期せずして発せられたことに注目せずにはいられなかった。

私はこのような意味においてニュウトン力学をば今日におけるアングロ・アメリカ的支配力

のいわば象徴として考えられないだろうかと思う。われわれの日常経験の表面的な領域においては、今もなおそれは圧倒的に優越し、健在を誇っている。しかし古典力学がそうであるように、英米文明は多くの領域で限定を受け、その根本理念が重大な弱点を有することが明らかになった。そのことは、もはやニュウトンの物質観が自然の説明として到底かつての位置を保持し得ないことに似ている。しかもわれわれは、新興の革命的な物理学を過大に評価し、これをもって古典力学が完全に克服されたと見ることは誤りであり、いまだ相対性理論も量子力学も17世紀に生れた自然観に代ることはできない。むしろ19世紀以後今日に及ぶ物理学の革命は、古典力学の中に存在する内的な矛盾の論理的発展として、いわば個々の物体をテーゼとするアンチテーゼ、その裏がえしとして起ったものに過ぎず、すべては同一路線上の出来事であって、いまだこの路線そのものの変革をいみしないのである。科学史家ギリスピーの言うように、今世紀になっても物理学の法則や性格は少しも変わっていない。(Coulston Gillispie: *The Edge of Objectivity, An Essay in the History of Scientific Ideas*, 1960, 島尾永康訳, 科学思想の歴史, 第4章) このことは技術についても妥当するのであって、古典理論の開発したエネルギーと原子力エネルギーの如きものと、量的には異なるとはいえ、技術の法則と性格とは毫も変わらないと考えられる。従って、今日の物理学者の当面する壁、狂気をさえ口にせしめる理論の分裂状況は、古典力学に対して外部から生じたものでなく、その内部から、その存在そのものから起こっているものといわなければならない、と思う。同じように私は、今日の人間的世界を、アングロ・アメリカ的文明の基本路線の上にあるものと見なし、その收拾すべからざる恐るべき事態を、この文明そのものの内面的現象、いわばその体質的疾患として理解したい、と思うのである。

次にわれわれの本題である戦争に直接関係する政治経済の領域においてアングロ・アメリカ的文明の支配につき観察しよう。実はこの政治経済の領域こそ、17世紀イギリスを発出点とする力が、今までの3百年をつうじて最も強い影響を及ぼし、今日なお次次に燃えうつり、驚くべき成果を挙げつつあるものであって、それはたんに、アングロ・アメリカ的国家体制の国々が最大の富をほこり、ドイツや日本のように最近までアングロ・アメリカ的理念に必死の抵抗をこころみ独自の原理をもって挑戦せんとした国家がついにこの理念を受容れ、その結果これらの国家の歴史にかつてなかった経済の繁栄を現出したことや、さらにまた、ソウエトの如き一度この理念を徹底的に拒否せんとした国家が今や局部的にはあるとしてもこれを復活させつつあることなどにとどまらない。表面的には実にこの支配に対して反逆し、いわゆる民族解放闘争としてこれに頑強な抵抗をなしつつあるものすらも、真実には最も忠実なアングロ・アメリカ的理念の伝承者学習者として、その強い影響のもとに立っているに過ぎないという逆説すら成立するほどである。トインビーによれば (*America and the World Revolution*, 1962. 邦訳「うしなわれた自由の国」) 中国にせよヴェトナムにせよ、あるいはキューバにせよ、アメリカ人が190年前に為したことを為しつつあるに過ぎない、18世紀末アメリカはいまだ農業

国であり、今のアジア、アフリカ、中南米の諸国民のごとく国民の大部分は農民であった。ところでこの農業国で史上空前のことがおこった。すなわち農民が武器をとって圧制者に向かって立上ったのである。かかることはまことに前例のないことであって、これがアメリカ革命でありアメリカの独立であった。今日世界の各地で生じている反米闘争なるものは、実はこの190年前のアメリカ農民のやったことを各地の農民が模倣し再演しているのであって、これに対しアメリカが口実を共産主義にかりてその制圧に躍起になっているのは、まさに己れの過去を忘れ、当時の英国政府の愚昧をくりかえしているに外ならぬ、のである。このトインビーの説をさらにつきつめてゆけば、アメリカ農民をして武器をとって圧制者に向かわしめた原動力は、なお17世紀にさかのぼり、1600年代の中頃英国において人民の議会に国王を召喚し、人民の名において国王を処刑したピューリタン革命にあるのであり、このピューリタン革命こそアメリカ、フランスにおいて次次に人民の支配をうち立て、20世紀に入ってソウエト、中国の革命にまで導き、その後今日にいたるまで世界各地においていわゆる反英米の人民闘争なるものをひき起しつつある根源そのものである、ということになりそうである。「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。」今日の革命は、近代ヨーロッパ文明を世界に冠たらしめた原理の忠実な発展、展開である。今日の革命こそアングロ・アメリカ的理念の支配の樹にみのった果実であって、われわれは、この果実によってこの樹を知ることができると思う。

それなら、ニュートン力学と同じように17世紀英国において生まれ今日に至るまでのすべての資本主義的経済の発展はもとより、一見反英反米の闘争とさえ見られるものの原動力となった原理とは何であるか、それは、アメリカ、フランス革命の人権宣言、ひいては日本の現行憲法にも大きく取り入れられているものであり、いわゆる天賦人権として人類普遍の原理として意識せられている、すべての人間、すべての一人一人の個人は各自の慾望の追求において等しく自由であり、他人からの制肘を受けてはならない、という思想である。われわれはこのような人間観をきわめて容易にニュートンの自然観とのアナロジイによって思い浮べることができはしないかと思う。自然界において大小それぞれの物体が真空を隔てて存在しているように、人間社会においてさまざまな人間が相互に全く自由に独立に隔絶せられて生きている。万有引力は、すべての個々の物体に引力を想定するが、この原理は、すべての人間に自分自身の利益を追求する活力を前提する。物体と物体との関係、相互作用は引力によって生じるが、それはあくまで遠隔作用であって真空をこえてであり、物体と物体とをへだてる真空は決して埋められない。人間もまた相互に決して満たされ得ない間隔をもっているのであって、個人自身の内部から生じる慾望が他人に影響をあたえ相互作用を産み出すとはいえ、それはあくまで遠隔作用であって、個人の自由と独立とはあくまで保持されているし、また保持されなければならないのである。1776年のアメリカ独立宣言では、「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって一定のうばいがたい天賦の権利をあたえられ、その中に生命、自由及び幸福の追求の含まれていることを信じる」、1780年のマサチューセッツ憲法では、

「すべての人は、生れながらにして自由かつ平等であり、生来の本質的、かつ譲ることのできない一定の諸権利をもっている」、フランス革命の有名な「人及び市民の権利宣言では、「人は、自由かつ権利において平等なものとして生まれ、かつ生存する」となっている。これらの文面をみるならば、すべての人間が相互に独立した個体として平等であり、自分自身の慾望を自由に追求できるというのは、本来の理想でなくて生まれながらの事実である。りんごの実は何回となく地上に落ちながら、ニュウトンが最初に見出すまでその真相をあらわさなかった如く、人間社会もまた幾万年の過去から、個人と個人との集合体でありながら、それが17、8世紀まで自覚されずに来た、というわけである。少なくともこれらの憲法を書いた人々は、そういうふうに考えていたらしく思われる。

この、17世紀英国に源を發した新しい人間観がどんな反響をよびおこし、いかに大きい人間のエネルギーを目ざめしめたかは、くりかえす必要はない。それは同時代の英国に出たニュウトンの自然観と同様 300年を経た今日なお新鮮な活力を保持し、人工衛星にも似た人間界の奇跡を産みつつあると言っても言い過ぎではないと思う。巨視的領域にかんするかぎり、自然界も人間の世界も、アングロ・アメリカ文明の地位はいよいよ重きを加えつつある、ということができそうである。しかし、ひとたび眼を事物の表面からその奥底へ、いわゆる巨視的領域から微視的領域へと転ずるならば、われわれは、人間界においても自然界に劣らぬ偉大な変化が生じ、古典力学に対する相対性理論や量子力学の革命が起り、300年間上昇の一路をたどったアングロ・アメリカ的文明の原理と基盤とをゆりうごかしつつあることを見出す。世界に冠たるアングロ・アメリカ帝国の悲劇的相貌、これがわれわれの面前にあるところのものである。この現代ローマの興亡は、全世界の人間の運命に深く関わっていると思われるので、好むと好まざるとにかかわらず、われわれはこれに大きく関心し、この帝国のたどる論理を探らなければならない、と考えるのである。

私は、ここにおいてマルクスの位置がひじょうに重要なのではないか、と思う。言うまでもなくマルクスはきわめて複雑な人物であり、マルクス主義はおそろしく多面的な現象である。マルクスは、宗教の教祖のようでもあり、予言者のようでもあり、哲学者でもあり、革命家でもあり、科学者でもある。かかる人物として彼は、その没後わずか半世紀にして人類の3分の1をその支配下におく一大運動の発出点となった。このような人物については、ひっきよう何をいっても、盲人巨象を撫すの域を脱し得ないであろう。

私は、マルクスに対する視点をただ科学の一点に絞ってみようと思ったのである。むろん私も、マルクスが何億という人民を溢き立たせ、大きな革命を成就させ、今なお至るところにおいて多数の信奉者を獲得しつつあることに興味をおぼえるが、しかしかかることはひっきよう学問的には重大ではないだろう。新興宗教がどんなに大衆を集めたとしても、そのことはただちにその神学が科学的に価値あることをいみしない。いったいマルクスの理論なるものの中に、たったひとつでもよいから、万人が万人ともに承認せざるを得ない科学的真理があるの

か、これが私の問題である。マルクスの龐大な教説の大部分をば、ある信仰にめぐまれた人々にとっては重大な意味をもつが、そういう信仰をめぐまれない人間には到底受容れがたい宗教的乃至擬似宗教的な神話であるとして棄て去ってもよい、そこにただひとかけらでもマルクス主義でない人々、むしろ反マルクス、反共産主義の人間にも充分証明することのできる真理がふくまれていないであろうか、このように私は考えたのである。その結果私には、マルクスには新興宗教の教祖である以外に少なくともいくらかは科学に対する偉大な貢献があったと思わざるを得ない。それを要約して述べよう。

さきに若きヘーゲルがニュウトン力学に対して警戒の眼を向けたことに注目したが、あたかもこれに呼応するかの如く、25才の若きマルクスが、人間界においての万有引力の法則ともいふべき近代法の基本理念たる人権、その最も顕著な表明たるアメリカ、フランス二大革命の権利宣言に対して、これをきわめて苦々しい、きわめて奇怪な文書であるとして不信の念をもって取扱っていることは、まことに注目にあたいする事実である、と思う。すなわち、「ユダヤ人問題によせて」(1843年)の中で彼は、これら二大革命のさいに発布された憲法、宣言の各条項について検討し、自由、平等などの基本的権利のいずれもが、ひっきよう利己主義の主張であり、その保証であるに過ぎないことを見出だしている。たとえば自由の人権は、遊離せられた孤立的な原子としての人間の自由をいみするにすぎず、人間と人間との結合を基礎とするどころか逆に人間からの人間の離隔を基礎としている。そのほか人権のどれをとってみても、自己に閉じこもっている、自分だけの私の利益と我意とに閉じこもっている、そして共同体から離隔されている個人としての人間、すなわち利己的人間以上に抜け出るものではない、というのである。まことにマルクスの発した、この「人権のどれをとってみても利己的人間を抜け出るものはない」との言葉は印象的である。近代社会の根本法則として今日にいたるまで全人類の運動を指導してきた基本的人権の思想が、はたしてかかる利己主義に過ぎないかどうか、はとにかくとして、マルクスがこのように受けとっていることは事実であり、それはちょうどヘーゲルが、現に今なお偉大な成果を挙げつつあるニュウトンの万有引力の法則を、人類に禍をもたらすものと受けとったことと軌を一にしている。

しかし、ヘーゲルがニュウトン力学を攻撃しながら、自ら物理学者となってニュウトン力学以上の力学を展開せしめなかったのに反し、マルクスは、人権宣言や革命憲法の利己主義を指摘した後、利己主義の研究を一步すすめることによって、古典的な利己主義の科学をいっそう拡大し、ニュウトンの古典的力学よりも新らしい最近の力学の方がいっそう強力であるといういみにおいて、いっそう強力である科学を導き出したと思う。マルクスの科学者たるゆえんは、人権の本質を利己主義であるとし、かかる利己主義の上に構築せられる社会(すなわち近代ブルジョア社会)において未曾有の禍が到来することを説くことのみにとどまらなかった。それだけのことならば、ブルジョア革命に反対した保守的な宗教家倫理家も皆言ったことであった。マルクスは、いったん人権思想の本質が利己主義にあることを洞察した後に、もはや利

己主義に対して宗教的倫理的態度をとることをやめ、科学者として、あたかも自然科学者が火や水に対する如く、これを観察し、そこから何人もイデオロギーに関係なく認めざるを得ない人間社会の法則をひき出したのである。

彼の全生涯をかけた資本論は、「政治経済学批判」という副題をもっているが、彼にとっては、アダム・スミス以下ベンタム、J.S. ミルにいたるいわゆる政治経済学こそ、上記の人権思想を根幹とする近代法体系の具体的内容をあたえるものであり、ここにおいて利己主義は、売り買いのいとなみとして商業として、あたかも万有引力にも似た全人間活動の根本原理として説明される。スミスの国富論が、資本主義の聖書といわれるのは当然であって、それが人間の利己心と、利己心にもとづく相互間の取引、商業交換の讃美をもって始まっているのは、偶然とはいえない。スミスは、ニュートンがりんごの実の地上落下という日常自明の事実の中にもろもろの天体を空中に浮かせている法則を求めた如く、われわれが毎日のように利己的な慾深きパン屋からパンを入手し、同じく利己的な肉屋から肉を口にしているという平明な事実には注意を促し、大いなる国家もまた同様の法則によって運営せられる、と言ったのである。だれもまだ2匹の犬または猫がお互いに納得づくで、口にくわえた食物を交換し合っているのを見たものはないだろう、無数の動物の中で、ただ人間だけが相互に自分の物と他人の物とを交換し、それぞれに利益を得ることができる、交換は利己心以外の何物も前提しない、お前のもっているそれを私にあたえよ、その代りに私は、私の有するこれをお前にあたえる、その結果お前も私もいっそう幸福になる、これが交換、つまり商業へのいざないであり、それは、それ以外のどんな高い道德をも必要としない、いったい人類は昔からさまざまな道德宗教のおしえによって自己犠牲や滅私奉公を強いられたが、何を得たか、何も得なかったではないか、社会のため国家のために一身を犠牲にするというようなかけごえから碌なことができたためしはないのだ、私たちにあって一生の中にたった一人の友人を得ることさえ至難であるとすれば、国家の経営を人間の自己否定の上に立脚させようという試みは、失敗に定められている、物体を空中に押しあげる唯一の方法が、その空中よりの落下の法則に従うことであるように、国を富ませ社会を繁栄に導く唯一の途は、人間の利己心を利用する以外にないのであって、それが交換であり商業であり、商業こそ人間の最も人間的な仕事なのである、というのがスミスの国富論を貫ぬく根本思想であり、政治経済学と称する社会科学なのである。これこそ、個々の物体にそなわる引力の遠隔作用をもって自然を説明する古典力学に対応する、個々の個人にそなわる利己心と利己心との相互関係たる商業交換をもって人間界を解明する古典的経済学を外ならない。最も英国的な哲学者であるといわれるエドモンド・バークは、商業の法則を神の法則と言ったが（資本論第1巻第24章第6節参照）、今日のバートランド・ラッセルすら、商業をば人間の自由な生活の表現であるとしている（Unpopular Essays, I.）ことや、アメリカの多くの政治家が free enterprise の維持を自由そのものの維持と同一視する傾向あることなどから見ても、17世紀にさかのぼる利己心と商業との理論が、アングロ・アメリカ的文明の特色として

いかに深くそこに浸透しているか、を知ることができる。小島祐馬氏は、中国思想数千年の歴史を通じて人間の利己的活動とその具体的表現たる商業とを是認したのは、ただ史記の貨殖列伝のみであって真に空前にして絶後である、もし中国においてこの司馬遷の思想が大勢を支配し国家公認の考え方となり得ていたならば、中国は資本主義国家として欧米におとらぬ大国と成ることができていたかも知れぬ云々と書いているが（小島祐馬著「古代支那研究」）事態は西洋においても長い間中国のそれと大差なかったのであって、利己心と商業とは宗教及び道徳のきびしい追求を免れなかったものであり（トニー著出口・越智訳「宗教と資本主義の興隆」）このいみでスミスの提供した新しい社会科学の理論がいかに前代未聞の企てであったか、を察することができると思う。今日でこそ「資本主義のバイブル」などといわれて既成の旧体制旧秩序のための弁護論とみなされるスミスの著書も、当時は最も革命的な進歩的な理論の展開として保守的な人々から忌避せられ、いかがわしい背徳の書として糾弾されたのである。

マルクスの仕事の科学的意味を知るには、古典力学に対する新しい力学の立場を思い浮べてみるのが、最も適当ではないかと思われる。古典力学は、個々の物体に重きを置き、力をこの個々の物体から出るものと見なし、物体と物体との間にあるものを考えなかった。新しい物理学の革命は、この考え方の弱点を衝き、この考え方を逆転させることから始まったのである。マルクスのやったことも全く同じであると思う。彼は次のように考えたのではないだろうか。すなわち、離れ離れに孤立している单子としての個人の中から発生する利己心と利己心との相互関係たる商業をもって人間を説明するスミスとスミス以後の政治経済学の立場は、なるほど私たちの日常経験の表面的な観察に一致し、一見したところたいへん合理的に見える。たしかに人間はそれぞれ別々の肉体をもち、他人の熱さ痛さを感じず、またわかれわかれに生き死にする。私の身体は隣人の身体ではない。これはまことに日常自明の事実であって、このような日常自明の事実から理論をつくりあげたのが、政治経済学と称する資本主義の護教学なのである。しかしほんとうの科学というものは、このような日常自明の経験的事実から一步先にすすまなければならぬ、そのためには私たち一人一人の身体の如き目に見えるものから、一人一人の人間と人間との間にある直接目に見ることのできないものに注意し、スミスの考え方を逆転させて、個人と個人との間にあるものを中心とし、この直接目に見えないものから逆に目に見える個人及び個人の利己心なるものを説明すべきではないか、と。私は、科学者マルクスの念頭に、まさに物理学の革命をなした物理学者の場合に酷似した、考え方の逆転が生じた、と思うのである。

古典的な法体系と個人本位の社会科学とは、利己心なるものを離れ離れに孤立する单子としての個人の内部に発生するものと見なす。食欲や性慾の如き、いわゆる生理的慾望はもとより、名誉慾、金銭慾のような慾望も、結局のところ個々の身体から発生する個人的慾望である、と解される。しかし、マルクスは、人間はすぐれて社会的な存在であって、人間のすべての慾望は、個人からでなく、個人と個人との間から、すなわち社会から発生する、というので

ある。たんに名誉、金銭の如き欲望のみならず、普通に個々の身体から出ると考えられる食欲、性慾のような欲望すら、実はすべて社会的なのである。彼が、「賃労働と資本」の中で、個人は社会的諸関係の総和である、とか、われわれの需要と享楽とは社会から発生する、とか書いているのは、この意味であると思う。

かかる立場から如何に大きな人間観の変革が生じるか、想像に余るものがあるであろう。人間の世界は、自然の世界がもはや古典力学時代の、均齊のとれた秩序整然たるメカニズムでなく、すべてが不安定であり、不均衡であり従ってたえざる生成と消滅との相互転換相互依存の世界であるように、もはや万人がそれぞれ自由平等独立の主体として、己れの欲望の完全な主人として、己れに固有の軌道を運行する予定調和的なスミス的世界でなく、自由も平等も独立もかりそめであり、個人の主体性も不安定であり、何人も己れの欲望を己れ自身によって規定することはできないのである。ある資本家に向って、お前はどれだけの利潤を得たら満足するのかと問うても無駄であろう、彼は仲間の資本家たちとの関係の中に立っており、その満足は、他の資本家たちの得る利潤との比較によってのみ決定されるから。いわんや、これらの資本家によって使われている大多数の勤労者に対して、君たちはいったいどれだけの賃金を得たら満足なのか、と問うことは、愚かな試みであるといわなければならない。マルクスは、勤労者たちが、実質賃金の増大、消費水準の向上、物資と享楽との増加によって満足させられるだろうという資本主義弁護論者の考え方を、経験主義的非科学的考え方として断乎しりぞける。そもそもこれらの勤労大衆は、万人の平等をうたう国家の法によって、資本家に対しても平等でなければならないという「先入見」(Volks vorurteil 資本論第1巻第1章第3節)をあたえられている故に、資本家の利潤や消費生活や享楽の増大する割合が自分たちの賃金や消費生活や享楽の増加する割合を上廻るかぎり、物質的に豊かになればなるほど、「いよいよますます不快に、不満に、押しひしがれたような気持になる」(賃労働と資本)「われわれは、われわれの欲望と享楽とを社会を基準にして測る、われわれはそれらをもろもろの対象物(Gegenstände)を基準にしては測らない、それらは社会的な性格をもつものであるから、相対的性格のものである」(同上)と彼は書いている。このようにして、スミスにとって社会が、個人の利己的欲望の均衡のとれた静的調和的メカニズムであったのとは逆に、マルクスの目にはそれは、不平不満の情念の溢き立つ自己否定的動的な流転として映じるにいたった、と思われる。かかる人間観は、新しい自然観に対応する新しい人間観として科学的にその妥当性を主張できるものと言えよう。

このような人間観に立った社会科学から、古典的社会科学からはそれほど重大性を認められなかったひとつの技術が発展してくる。すなわち、ひとたび利己的欲望の出所が個人ではなくて個人と個人との間の関係であり、人間の満足が限定可能な絶対値でなくて不確定な比例値であることがわかった以上、この不確定な比例関係を用いて大衆の欲望を無限に大ならしめ、欲求不満を際限なく増大せしめることのできる技術がそれである。これは、宣伝といわれ煽動と

いわれ、あるいはまた上品に広告と称せられるものであって、もし人間の慾望が個人の内部から独立に発生するものならば、決して効果をあらわすはずのないものである。ヒトラーは、うそも間断なく繰返されることによって真理になると言ったそうであるが、今では宣伝や煽動の技術は、左右の政治的野心家によって熱心に適用されるのみでなく、古典的な旧体制の保持を標榜する保守的な資本主義的経営者すらもが広告と称する同種の技術にその運命を賭けていることは、周知の如くである。「食物が乏しかったころにはひとびとは食物の必要を広告から教えてもらう必要はなかった」とガルプレイスは書いている。(The Affluent Society, 11, 3)。今では、なくてはならぬ必要物はすべて充足され、人々は広告によって慾望を人工的に造成されなければならないのである。国家最良の頭脳を慾望の人造に動員しても、なおかつ生産を吸収しえず、過剰生産恐慌の可能を免れえず、欲求不満は増大するばかり、というわけで、現代社会は、原子エネルギーの開発からくる脅威にも似た人間慾望エネルギーの巨大な奔騰の深刻な問題の前に立っている。「私は向こう4年間の私の在任中に果してこの国が存続するかどうかを知らない」、これは国家元首の就任のこととしては余りに不似合に感ぜられたので強く記憶にのこっているが、短い生命を終ったケネディは、現代社会の動的な本質を直感していたのかも知れないと思われる。

私は、マルクスが古典的な個人本位の社会科学の内的矛盾を完全に克服した新しい理論を提出した、という意見にはくみすることができない。彼以後彼の教えに従ったといわれる共産主義国家が現われたが、それらはいずれも資本主義国家の矛盾を逆の形でくりかえし経験している。新しい物理学が古典物理学の二律背反をいまだ揚棄することなく、物体と場との二元論を脱しないように、マルクスの社会科学も個人と社会との間隙を埋め得ないのである。それゆえに、学問的には、彼はスミスに対するアンチテーゼであり得ても、いまだこれを克服し得ず、基本的にはスミスの利己心の路線にあるとしか考えられぬ。従って、マルクスの理論は、スミスの外からではなく内から、その論理の必然的展開として生じたものであって、資本主義と社会主義との激突は、資本主義内部の激突であり、資本主義そのものの悲劇を表現するものに外ならない、と考えるのである。

このように見てくるとき、私たちは私たちの眼前にくりひろげられつつある世界的な対立抗争の本質をいづらか理解できるのではないか、と思う。それらはすべて、17世紀英国のピューリタン革命以来の英米的理念の前提のもとに起動している。まことにヘーゲルの言のように、ニュウトンのりんごは人類の禍であり、マルクスの指摘の如く、人権宣言は利己主義という人間の根本悪の解放であったかも知れぬ。ニュウトンのりんごなしには原水爆はなく、人権宣言なしには欲求不満の暴発も起らなかつたらうから。しかし、歴史の車輪は敷設された軌道をすすむ外なく、われわれは、この軌道から自由になるためにも、まずこの軌道を歩む以外にない、すべては、アングロ・アメリカ文明の内部から発生しているのであり、利己主義と商業とを神聖な法にまで高めた近代の支配的国家の内的矛盾のあらわれであり、病根は深くこの国家

と文明との存在の根本によこたわっているゆえに、この国家と文明とが深刻な質的变化を遂げるまで恐らく続くことであろう。自然の科学が、古典物理学と新物理学との分裂のかなたに、より調和的な自然を発見するべく努力するように、人文社会の諸学は、この現代世界の致命的な対立状況をいやすために、しんぼう強い試みを重ねなければならない、と思う。

（附記 以上は昭和42年7月17日文学部教授会懇談会で話したものである。紀要のためにはもうすこし異なった形の論文をと考えていたが眼疾その他の事情で実現できなかったことを申しわけなく思う。）